外国籍住民の郊外団地居住の実態

－神奈川県いちよう団地を事例として－

A STUDY ON THE LIFESTYLE OF FOREIGN PEOPLE IN A SUBURBAN PUBLIC HOUSING ESTATE

－ A case study of Ichio housing estate in Kanagawa prefecture －

垣野義典*, 初見 学**

Yoshinori KAKINO and Manabu HATSUMI

The aim of this paper is to clarify the usefulness of public housing estate for ‘new commers’. The result of field surveys in Ichyo public housing estate and analysis are as follows; 1) By using environment both inside housing estate and in the suburbs, foreigners can gain many opportunities to meet someone, buy, or eat something. 2) “Tatami” is unsuitable for foreigners and covered by plastic film or rugs. It is necessary to let foreigners understand the Japanese traditional style of living. 3) There is much customization in an apartment, for example, many walls painted blue or white by foreign residents and curtains fixed instead of Japanese sliding doors. In case a household having only children less than 15 years old, the apartment is used as one space. But, if it has a child over 15 years old, a room is assigned to him. And, living, dining, and kitchen are set to spaces following the lifestyle of residents.

keywords : *Foreigners, New Commers, Suburbs, Public Housing Estate, Residential Environment, Customization*

外国人, ニューカマー, 郊外, 団地, 居住環境, カスタマイズ

1 研究背景と目的

1950年代半ばから70年代に建設された公営の集合住宅団地は、近年、老朽化、居住者の住様式の変化や高齢化が進み、空室が増加している。団地をストックとしてどう活用してゆくかは、近年の大きな社会的課題であり、建築の分野でも、団地を建て替えることなくどのように活かすかが活発に議論されてきた。

一方、日本は1980年以降、工場労働者として外国人を受け入れてきた^{注1)}。現在、日本人と外国人、外国人同士の様々な文化摩擦を含みながら、外国籍住民^{注2)}数は増加の一途を辿り定住化が進みつつある。同時に、これらの外国人の住居として、工場地帯近郊にあり低家賃の団地の空室が受け皿となる事例がみられる。現在は団地を、今後も増加が予想される外国籍住民のための居住環境として、見直してよい時期にあるといえる^{注3)}。

しかし当然ながら、外国籍住民が、母国の制度や文化の異なる日本で生活を営むことは容易ではない。日本人や外国人同士がいかに共生してゆくかは今後の大きな課題であり、既往研究では、社会学、教育学の面から、いかに外国籍住民を支援するか、その中・長期的支援方法やシステムをテーマにした研究が目を引き^{注4) 1) 2)}。また、建築・都市環境の分野でも、稲葉らの一連の外国人の居住環境に関する研究は、外国人の生活実態と社会的課題を浮き彫りにしている点で意義深い^{3) 4)}。このように、外国人の環境は未整備な部分が問題視され、社会的課題とされてきた。しかし、団地に住む外国籍住

民の生活をつぶさに観察すると、けして贅沢とはいえない環境を、実に巧みに住みこなす様子が確認できる。この創意工夫した団地生活の実態は、これまでほとんど明らかにされていないにも関わらず、外国籍住民の安定した生活環境を整備する上で、要件をふくんでいる。特に、建築計画的視点から、どのように住戸内を設え、団地周辺の環境を利用しているか捉えることは意義があろう。以上の背景より、本研究の目的は、現在情報に乏しい、団地における外国人の居住実態、生活意識を詳細に把握し、郊外団地が外国籍住民にとって有用な環境となり得るための要件を考察することである。なお本研究は、団地ストックの活用方法の提案、外国籍住民の居住環境施策の提案の2つの方向性を持ち得るが、本研究は主に、団地ストック活用の方法構築を目指している。

2 調査概要

2-1 調査地概要 調査対象地は、東京都内から電車で50分以内に位置する、神奈川県営・市営いちよう団地とする(図1)。選定理由は以下3点である。①70年代前半に建設された団地で、立て替えることなく今後もストックとして活用してゆくことが決定している。②中国からの帰国者、インドシナ系外国人が多数入居しており、全世帯の2割を占めている。③外国籍住民の受け入れにおいて先進的団地で、外国籍住民の定住化も進み多文化の共生を進めてきた歴史がある。

* アalto大学(旧ヘルシンキ工科大学)大学院
研究生・博士(工学)

** 東京理科大学理工学部建築学科 教授・工博

Postgraduate Guest Student, Dept. of Archit., Aalto University, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Archit., Tokyo University of Science, Dr. Eng.

※注 事例欄の「中」は中国出身、「V」はベトナム出身、「C」はカンボジア出身を意味する。

平均	9.1	8.1	居住人数 平均4.0人
----	-----	-----	-------------

2-2 調査方法 本研究では前述の団地を事例とし、外国籍の団地居住者（以下、居住者）の生活実態を捉えるために、実際に居住者の自宅へ訪問し、住戸内の実測、生活状況についてヒアリング、アンケート調査を行った。調査期間は2005年5月から9月で、調査内容は①住戸内②団地内③団地周辺地域での住まい方の3視点を設定した。ヒアリングでは「どの場所で、どれくらいの頻度、誰と、何をするか」についてコメントを得、1/2000住宅地図、1/8000広域地図に記録した。アンケート調査では、家族構成や居住年数など属性を把握した。調査対象は、中国、ベトナム、カンボジア出身の計11世帯^{注6)}とし、いちょう団地内で開かれる日本語教室に通う受講者の中から選出した^{注7)}。すなわち本対象は、外国籍住民の中でも「日本語教室に通う程度以上の交流を臨んでいる居住者」という限界性をふまえながら、分析をすすめる。なお対象者の在日歴、在いちょう団地歴の平均はそれぞれ9.1年、8.1年、いちょう団地入居理由として、「親族が住んでいる」とコメントしているのが7世帯、各対象世帯の居住者人数は、平均4.0人である（表1）。

3-1 団地内での生活実態 対象 11 名の団地内での利用場所は、

図1 いちょう団地における利用場所

– 1356 –

図3 買い物中心型(2例)

図4 親族・友人宅行き来型(3例)

図5 集い参加型(3例)

図6 積極利用型(3例)

積極的な姿勢をみせている。同様に近郊地域では、半数が同国人の友人をもつほか、通勤、通学先に親しい友人がいる。

3-3 居住者の生活類型 以上、11名の団地内外での利用場所や交流の様子をふまえると、各対象者の生活様態は、大きく「買い物中心型」、「親族・友人宅行き来型」、「集い参加型」、「積極利用型」の4種に類型できる。買い物中心型は、買い物以外で団地内の環境を利用することがほとんどなく、挨拶程度の知り合い以外、親族・友人もほとんど団地内にいない(図3)。親族・友人宅行き来型は、買い物以外には、主に親戚・友人との交流を目的に、互いの家を行き来しながら団地で過ごす(図4)。中-2は、同じ住棟に友人が5人おり、互いの家を頻繁に行き来している。集い参加型は、サッカーやバーベキュー、PTA、自治会活動など、人が大勢集まる場を選んで参加、交流する(図5)。積極利用型は、上記3種が複合したタイプで、団地全体を積極的に活用する(図6)。

次に、近郊地域を誰と利用しているかに着目すると4種に類型できる^{注11)}(表5)。「単独型」のC-2は、自分一人の時間を重視し単独で地域を利用している。「家族中心型」は中-2のように、家族で過ごす場所として地域を利用する。「職場・学校コミュニティ型」はV-1のように、職場や学校で知り合った友人と利用する。「団地コミュニティ型」は団地内に親しい友人がおり、団地内の友人と連れだって近郊地域を利用する。

最終的に、表6の団地内外での生活類型をもとにマトリクスが作成できる。表6より、中-3やV-1のように、団地内では買い物を中心に利用するが、地域では職場の友人と交流するタイプ、中-2やC-1のように、団地内では親戚や友人と交流するが、団地外では家族で過ごすタイプなど団地内と地域を使い分けている様子が捉えられる。

4 団地住戸における生活実態

4-1 対象住戸と家族構成 まず便宜的に、対象者の家族構成によって、15歳未満の子どもと両親で構成される「子育て世帯」、家族に15歳以上の子どもが含まれる「大人家族世帯」、15歳以上のみで構成される「大人世帯」に大別する。対象者の住戸は、3DK田の字型(3例)、3DK回遊型(2例)、3DKキッチン中央型(3例)、3K(2例)、4DK(1例)の全5タイプである(図7)。なお、外国

表5 近郊地域における生活類型

<p>■単独型(1例) C-2: 湘南台、藤沢に行くことが多い。平日、休日ともに家にほとんどいない。休日は、よく図書館へ行く。絶対に一人で。自分一人の空間だから、誰にも邪魔されたくない。勉強とか趣味のために行く。図書館とスターバックスをいったりきたりする。図書館は蔵書がおおく、広い。連絡をとりあっている友人は一人だけ。他の友人は結婚したり、仕事で忙しい。</p>
<p>■家族中心型(3例) 中-2: 土曜は子どもと3人、日曜は家族4人で、高座渋谷のジャスコ、オーケー、Dマート、マルエツ、電気屋はダイクマ、ジャスコ、ヤマダに行く。仕事帰りは、駅前の八百屋によることもある。外食は家族で月2、3回くらい。湘南台駅前の公園と文化センターへは、子どもと毎週、自転車で30分かけて行く。一日300円で映画をみたり、パソコンで遊ぶので、子どもが楽しみにしている。</p>
<p>■職場・学校コミュニティ型(6例) V-1: 会社で知り合った友人と遊びに行くことが殆ど。いちょう団地内で一緒に遊びに行ったりする付き合いの人は少ない。友人は多くが日本人。ベトナム人より多い。よく相談事をする。前の職場で出会った日本人女性とは8年来の付き合い。桜ヶ丘にすんでおり、一緒に食事に行くことがある。仕事先の経営者家族にも気に入ってもらっていて、社長夫妻と食事にいったりする。サイゼリヤに。奥さんとはカラオケにもいく。2〜3か月で辞めるパートが多いが、うまく働いている。短期で働いているパートの人達との関わりはない。一緒に行動することがない。社員旅行、忘年会といった会社行事には参加する。</p>
<p>■団地コミュニティ型(1例) V-2: 団地では、4家族と家族ぐるみの付き合いがある。よく相談するし、相談される。誘いあって、時間があれば車何台かで一緒に遊びに行く。家族ぐるみでかける。これまで箱根、富士山、江ノ島、八景島に行った。江ノ島は海を眺めに行く。夜景がいい。夏は毎週日曜に友人親子と湘南台のプールへいく。公園もあり、いいところ。車でいく。桜ヶ丘ではバーベキューをする。春は桜がきれい。</p>

表6 団地周辺地域における移住者の生活様態

団地外の生活様態	団地内の生活様態			
	買い物中心型	親族・友人宅行き来型	集い参加型	積極利用型
単独型			C-2 (25) 18, 長男	
家族中心型		中-2 (35) 6, 妻 C-1 (30) 14, 妻	中-1 (39) 15, 妻 C-3 (19) 3, 長男	
職場・学校コミュニティ型	中-3 (17) 0.5, 長男 V-1 (43) 7, 妻			V-3 (15) 12, 長男 V-4 (21) 3, 女 V-5 (21) 6, 三女
団地コミュニティ型		V-2 (35) 5, 妻		

※注 対象者(年齢) 団地居住年, 家族内での属性

3DK田の字型	3DK回遊型	3DKキッチン中央型	3K型	4DK型
V-1, C-1 大人家族世帯	中-1, V-2 子育て世帯	中-2 大人世帯	中-3 大人世帯	V-3, C-3 大人家族世帯
大人世帯 V-4				V-5

図7 入居時の住戸平面図

3DK 田の字型

長女の部屋は、ベッドが置けるように、襖を一枚外してカーテンに。

食事は椅子に座って食べる。来客時など人数が多い時は、テーブルの足を折って開んで食事する。女性はしやがみ、男性はあぐらをかく。

長男は色々な人の家を転々として、あまり帰ってこない

図8 大人家族世帯 V-1 (3階) の住まい方

入居と同時に壁を青く、間柱を茶色に塗った。塗ってくれたのは団地内のベトナム人。青は好きな色。床は全部同じシートを敷いた。

図9 大人世帯 V-4 (2階) の住まい方

3DK 回遊型

■間仕切り 玄関以外は戸や襖を外しカーテンにした。風が通るし部屋が広く感じられる。襖は汚れやすく壊れやすい。直すのも大変だからカーテンに変えた。

■床、畳 床は全て同じビニール素材のシートを敷いたので広く感じている。畳は掃除が大変だから。ビニールシートなら拭くだけ。カーペットを敷いたときもあったが掃除が大変で5年前に今のシートにかえた。

入居した時、壁が黒く陰気だったので白くペイントした。明るくなったし清潔感がでた。

■家具 テーブルは折り畳みのものだけ。広く感じたいから低めの収納家具を使うようにしている。部屋が狭いので、椅子やテーブルは置きたくない。

■食事 食事は、折り畳みのちゃぶ台を囲み床に座って食べる。朝は家族揃ってキッチンで、夕飯は息子達と六畳の部屋で。来客時も同じ。場所を変えるのは気分を変えたいから。

図11 子育て世帯 中-1 (11階) の住まい方

■食事 家族揃って、リビングのテーブルで床に座って食べる。来客時も同様。人数が多いと男性はリビングで飲み、女性はキッチンで動物の上に座って話す。以前はダイニングテーブルを使っていたが、子どもの椅子をひく音がうるさく、近所から苦情がきたので捨てた。

■娯楽 カラオケ 子供はカラオケでよく歌っている。カラオケにはベトナムの歌だけでなく、中国、日本、カンボジアなどもある。週末の夜に家族や友人と歌う。ただ、人数が多いと近所に迷惑だから時々。

■床 畳みは子供がいるので、汚れやすい。板に張り替えた。

図12 子育て世帯 V-2 (4階) の住まい方

押し入れは襖を外してカーテンに。出し入れしやすい。

■壁の飾り 玄関には幸福を招くとされる模様の絵を貼っている。特に信仰しているものはないが、仏の絵に折る。

■食事 朝晩、テーブルを開んで床座。普段はキッチンとリビング・ダイニングはカーテンで仕切っている。来客時は座布団をだしてカーテンをあける。広くなるから配膳が楽。

図10 子育て世帯 C-1 (5階) の住まい方

■食事 普段は、台所の側のテーブルと椅子で、朝、晩、家族揃って食事をする。来客時は、玄関隣の部屋でローテーブルを使う。中国ではテーブルを食事の時に出して、それ以外は片付ける。このテーブルは足が折れないから端によせる。床の見える範囲がたぐさになると、部屋が広くみえる。

冬、床にはカーペット。居間にはこたつをだす。こたつはお隣のおばあさんから頂いた。

3DK キッチン中央型

■食事 いつもテーブルで椅子に座って。朝はばらばら。母がつくる。夜は家族一緒に、父がつくる。寝坊すると食べずにでかけ、外で買う。中華料理が殆ど。

■就寝 自分の部屋で布団をしく。中国ではベッドだった。初めは背中が痛くてなれなかったが、今はなれた。ベッドをおくと勉強する場所がなくなってしまった。

図13 大人家族世帯 中-3 (6階) の住まい方

夏、襖をはずし、ござを敷く。

間仕切りはすだれやカーテンに。クーラーは寝室だけ。風が通るから問題ない。冬は襖をいれる。

保全協会に頼んで、台所をフローリングにした。以前の素材は固くて子供が転ぶと危なかった。子どもの安全を考えて。

冷蔵庫を隣の部屋に置いているのは、部屋の見通しをよくするため。家全体がすすきみえる。

■収納 たんすは最小限。収納は充分に足りている。義母の物を預かっているほど。

■就寝 4畳半にベッドをおいて家族四人、川の字になって寝る。夫と自分の間に子どもを寝かせる。子ども達はよくベッドの上で飛び跳ねて遊ぶ。

■床 保全協会に頼んで、キッチンでフローリングにした。以前の素材は固くて子供が転ぶと危なかった。子どもの安全を考えて。

■台所 少し狭い。特にステンレス台のスペース。中華料理は火と油をよく使うから、換気扇が小さいのが困る。中国のキッチンは台が石でできていて、ステンレスより便利。

図14 子育て世帯 中-2 (7階) の住まい方

■塗装 入居した時、父が壁を塗った。さわやかな雰囲気求めて薄いブルーに。天井も白くした。

■就寝 自分と妹はふとんをだして寝る。弟はベッド。

■キッチン キッチンレンガ調のシートを貼った。柱もレンガ調。父の趣味。

■床、壁 床、ベニヤの壁にはタイル調のシート、畳には絨毯

■間仕切り 妹のプライベートを確保するため、ふすまは入っている。しかし、自分と弟は、どこにだって寝られる。間仕切りはいらない。来客もないことから、特に間仕切の必要なし。

図15 大人世帯 C-2 (10階) の住まい方

L = リビング (団らん) D = ダイニング (食事) K = キッチン B = ベッド T = 居住者が食事で使用するテーブル ※注 紙面下側が南方

表7 住戸のカスタマイズ箇所

	家族構成	空間要素別カスタマイズ				生活行為別カスタマイズ		
		床、畳	襖 (● = 変更あり ×= 襖をそのまま使用)	壁・間柱の塗装 (×= 変更箇所無し)	装飾、写真 (母国文化色の強いもの)	食事 (T=テーブル Low= ローテーブル)	接客 (T= テーブル Low= ローテーブル)	就寝 (B= ベッド)
中-1	子育て	全面ビニールシート	● 襖→ カーテン	白	写真、花飾り	Low	Low	ふとん
中-2	子育て	フローリング、ござ	● 襖→ カーテン、すだれ	×	写真、タペストリー	T	Low	B
中-3	大家族	全面ビニールシート	×	白、茶色	写真、絨毯、タペストリー	T	コメントなし	ふとん
V-1	大家族	全面ビニールシート	● 襖→ 取り外す	水色	写真	T	Low	B
V-2	子育て	板、絨毯	● 襖→ カーテン	×	写真、木製タペストリー	Low	Low + シート	B
V-3	大家族	全面ビニールシート	×	青	写真、赤い仏壇	Low	Low + 襖はせず+シート	B
V-4	大人	全面ビニールシート	×	青、茶色	写真、花飾り	T	T	B
V-5	大家族	全面ビニールシート	×	×	写真、カレンダー、仏壇	T	Tもしくは庭先	ふとん+B
C-1	子育て	全面ビニールシート	● 襖→ カーテン	×	写真、幸運の札	Low	Low	ふとん+B
C-2	大人	絨毯、タイルシート	● 襖→ カーテン	水色	写真	T	T もしくは Low	ふとん+B
C-3	大家族	カーペット、シート	● 襖→ カーテン	薄緑	写真、タペストリー	Low	Low + 部屋をかえる	ふとん
事例数		7	7			T=6、Low=5	Low = 7	

を確保している (図14)。V-3では、家具を極力購入せず、自分たちで作成し壁に打ち付けている。ゴミ箱や仏壇も自作である (図10、16)。

■装飾、写真、宗教関連品 各住戸の飾りひとつとっても民族色である。特にインドシナ系の居住者には仏教徒が多く、それぞれの家庭で色彩豊かな仏壇や仏画を飾り、部屋に彩りを与える (図16)。

■庭での栽培 一階に住むV-5では、玄関先の庭で、ベトナム料理に使うベトナムミントやパクチといった香草を栽培している。また、夏に出現するへちま棚は、日陰をつくり、庭先に団らんスペースをつくる (写真1)。ここでは食事をする以外に、他のベトナム人居住者達のたまり場にもなっている (図18)。訪問した客は、玄関からではなく、この庭先から住戸に上がる。

4-3 生活行為にあわせたカスタマイズ 居住空間を、そこで生まれる行為「食事」、「接客」、「団らん」、「就寝」を中心にカスタマイズ方法をみる。まずV-5、C-3以外の9例では、食事をするダイニング (以下、D)、料理をするキッチン (以下、K) と団らんの場所であるリビング (以下、L) 間の仕切りが取り払われ、一体的にしつらえられている。例えば、3DK田の字型住戸の3例は、L、D、Kが一つの部屋で一体となっており (図8、9、10)、3DK回遊型の2例は、一部屋がLとDを兼ね、Kと連続している (図11、12)。また、中-2、C-2のように、D、Kが一部屋にまとめられ、LがDKと連続している例もある (図14、15)。C-3では、Lについてコメントが得られなかったが、DとKを連続させるため、「キッチンに近いから」という理由で、対象者の部屋がDを兼ねている (図17)。V-5では、D、Kが一つの部屋を構成し、対象者および父親の部屋がリビングとして使われる。この理由として両部屋が「南向きで明るく庭が見えるため」としている。襖は全室そのまま使用し、各部屋を空間的に分節している (図18)。

食事は、全ての大家族世帯で、「家族別々の時間に食事することが多い」とのコメントが得られた。逆に、子育て世帯では家族そろっての食事が多い。また、椅子に座ってテーブルで食事する世帯と、床に直接座って高さの低いテーブルで食事する世帯に分かれる。テーブルで食事する世帯の場合、テーブルが壁際によせられることが多い (図8、13、14、15、18)。しかし、友人などが訪れ食事する人数が多くなる場合、中-2、V-1、C-2では食事用テーブルの脚を折りたたみ、部屋中央に配置し直し囲む形式をとっている (図8、14、15)。また、L、Dとつなげるように、キッチンにビニールシートをひろげ座る場合や (図12)、来客時のみ襖をはずし玄関

表8 カスタマイズにより実現される居住空間

入居時	床、畳のカスタマイズ	襖の変更 × 襖 ● カーテン	家具 ■ = 固定家具 □ = 移動家具
V-1 (大家族世帯)			接客時に移動する
中-1 (子育て世帯)	タイル柄ビニールシート		食事時にテーブルを移動する
C-3 (大家族世帯)			食事時に移動する
中-2 (子育て世帯)	フローリング ござ		接客時に移動する

口にシートをしいて、自室、玄関、D、Kを連続させる場合もある (図16)。就寝は、概してベッドが多いが、ベッドとふとんを併用している世帯もある (図15、18)。中-3のように、母国での生活習慣もありベッドに馴染んでいても部屋を広く使うため、ふとんで寝ている居住者もいる (図13)。

4-4 カスタマイズ方法からみた居住空間 ここまで分析した、全11住戸のカスタマイズ内容を表7にまとめ、順次みていく。床、畳には全住戸で何らかのカスタマイズが行われている。7住戸で全面にビニール床シートがしかれ、比較的よく使われるカスタマイズ手法となっている。ホームセンターで購入し、自身で住戸にあわせて大きさを調節でき、手軽な手法といえる。襖の取り外し・変更は

7住戸で行われ、部屋を広く見せたり、幾つかの部屋をつなげて使う上で重要な手法である。カーテンに付け替えられる例も多く、各住戸で居住空間への工夫がみられる。壁や間柱を、自分たちで塗装することも多い。特に、ベトナム、カンボジア国籍の世帯では、鮮やかな青、緑系の色を好み、住戸内の雰囲気を変えて大きく変える手法となっている。また、それぞれの住戸で、壁に母国の飾りや写真が飾られ、母国の文化色が色濃くでる。

食事は椅子に座る場合が6例と、床に直接座る場合が5例である。しかし、接客時など人数が増える場合、端に寄せていたテーブルの脚を折り曲げ、部屋中央に配置して囲めるよう設え直したり、襖を外す、床シートを新たに敷く、といった工夫がみられる。

就寝は、ベッドを利用する世帯が多いが、部屋を広く感じたい場合、中-1や中-3のように、ふとんを使う事例がみられる。

以上のカスタマイズより実現される居住空間は、表8に示す中-1や中-2のように、出来る限り家具を壁際に寄せ、住戸中央を広く使いながら、時にローテーブルを移動することで場を設定する住まい方がみられる。他方、V-1は、2部屋を個室として確保しながら、接客時に机を配置しなおすなど、多目的に利用できる部屋を設定している。C-3は、1部屋を個室として使用しているが、それ以外を多目的に利用する住まい方である。

5 外国人の居住環境としての郊外団地

以上、本対象団地はいちよう団地1例のみではあるが、団地内、近郊地域、住戸内の3視点から、団地に住む外国籍住民の生活実態をとらえることができた。以下ではヒアリングから得られた団地、住戸に対する評価、問題点を参照し、郊外団地が外国籍住民にとって有用な環境となり得るための要件について考察する。

まず団地全体に対する評価では、文献4で、いちよう団地の外国籍居住者が「住みやすいと感じ今後も継続して居住する希望をもっている」ことが示されている^{注13)}。本調査でも、団地環境に対して肯定的なコメントが目立ち、団地内で生活に必要な品々がそろっていると評価されている(表9)。同時に、3章で分析したように、近郊地域を利用すれば、団地内では得られない環境を得ることが可能であり、郊外団地が、居住者達にとって必要なものを満たす前提を備えていると評価できる。

ただし、日本に住み始めた外国籍住民が母国から親族や友人を呼び寄せ、その連鎖によって、表4で示したように、いちよう団地に親族や同国人が住み、自分たちの居住環境として整えてきた変遷を見逃してはならない。つまり、どのような団地でも、いちよう団地と同様に外国籍住民が暮らしてゆける訳ではなく、同国人が集まって住める状況作りが前提にあるといえる。同時に、外国籍住民と日本の環境をつなぐ日本人の存在も大きい。

事実、いちよう団地内には、居住者が交流できる機会として、表5で示したように、個人、家族、親族、同国の友人、多文化の集まり、職場・学校の友人など、各居住者に合わせた実に多彩な交流の選択肢が用意されている。団地内で、家族や母国語の通じる同国人同士が生活できる環境設定は、最重要条件である。同時に、団地内に親しい友人がいない場合でも、日本人の支援者が個人的な相談をうけたり、日本語教室やサッカー大会など居住者にあつた集う機会を設定することで、多国籍の人々の交流を生むことが可能となる。さら

表9 団地居住に対するコメント例

■ V-1：団地は、とにかく便利。スーパーや郵便局などだいたい必要なものがそろっていて、遠くまで出かけなくてもすむ。
■ V-5：団地はすみやすい。コミュニケーションも、挨拶できれば皆暖かい。あまり冷たいと感じることはない。
■ C-2：団地は住みにくくはない。部屋が多少狭い場合もあるが、生活に必要なものが一通りそろっているので、便利。たんぼの風景は好き。きれいだから。特に散歩はしないが、あのあぜ道はいい。
■ C-3：カンボジアでは高い建物がなかった。日本では5階に住んでいるので少し怖い。32棟と高くてびっくりした。いちよう団地は、住むにはいい環境。一通り、色々そろっているから。

表10 団地住戸に関するコメント例

住戸に関するコメント例
■ 中-3：(住戸は)とにかく狭い。天井が低い。音も気になる。地震がきたら大丈夫かと不安になる。
■ V-3：家自体の狭さはさほど感じない。床に物を置かず上にあげている。けれども、自分の部屋のスペースがもう少し広くあって欲しい。ベッドだけで一杯になっている。
■ V-4：団地の住居は2〜3人で住むにはいい。それ以上になると個人のスペースがなくなるから、大変。居心地が悪くなると思う。
■ V-5：(住戸は)狭いと感じることはない。古いのがいいやだ。入居した時もとっぽろぼろだった。壁を塗って、畳を板張りにしたり、クロスを敷いた。襖もかえた。
■ C-2：3DKの狭さは普通だと思う。とくに狭くも広くもない。現在、自分は仕事で殆ど家にいない。帰宅して、入浴、就寝、食事しかない。くつろぐことはない。音、大声なども気をつけるが、密集しているし高層だから足音が響く。
■ C-3：カンボジアでは、もっと大きな家に住んでいたが、住戸は広さなど環境はちょうどいい。狭いとは感じない。
台所に関するコメント例
■ 中-1：台所は狭くはないし、不便さを感じない。料理は殆ど中華料理。
■ V-2：台所が不満。生活で一番困っているのが、台所が狭いこと。ガス台、水道はとても便利。調理台がもう1m長いといい。ベトナムの調理台はながい。火口がもう2つあると便利。料理の品数を増やしやすい。いつも鍋を2ひとつ床においてしまい、遊んでいる子どもに危ない。
■ C-1：キッチンには狭くはないが、今は人数が多いので大変。カンボジアからもってきたものはなく、新たに日本で購入した。カンボジアのキッチンはずっと広い土でできている。ガスや水道はすごく便利だけど調理台がなくて困る。
気候との関係に関するコメント例
■ V-5：夏は部屋の戸を開け放っていることが多い。風がよく流れる。軒先きなんかは冷え過ぎるくらい。天井が高いから冬は寒い。

に表6でとらえたように、近郊地域にある職場で友人ができる可能性もある。このように、居住者の交流様態に幅があることをふまえ、団地居住者が様々な「交流の選択可能性」を得られるよう整備することが重要となる。

団地住戸に関しては、台所に対する不満がきかれたが、住戸全体としては肯定的なコメントが目立つ(表10)。そして、4章で示したように、居住者の住戸カスタマイズ能力は高いと評価できる。家族の形態や間取りの構成、住戸の広さを読み取り、畳や襖、壁の色など、自分達の生活に馴染むよう、自分たちでカスタマイズする方法をもっている。一方で、どの居住者も畳を生活に活かしておらず、居住者の畳に関する知識、理解不足が伺える。今後、日本文化の理解へつなげるためにも、畳が日本の気候風土に根ざし、湿度調節、断熱、保温、吸音面で優れた素材であるとの認識を広めることが必要であろう。その上で、「感触がなじまない」などの理由で畳が活用されない場合は、外国籍住民のためには、畳よりフローリングでの生活を想定した団地住戸の考案もあり得る。家族構成に着目すると、年齢の低い子どもと両親で構成される場合、住戸全体を一体的に設え直すことができる。15歳を超える居住者には、個室を割り当てることが多く、自分たちで実現できる範囲でプライバシー確保につとめている。また、生活行為にあわせて、リビング、ダイニング、キッチンといった機能を住戸内に割り当て、接客時には柔軟に

設え直している。間取りは、家族構成にあわせ、特に 15 歳をこえる女性が生活しやすいよう、襖ではなく壁で仕切られた個室をそなえるなど、新たな間取り考案の余地はあるが、ひとまず、団地住戸は現段階でも有用と評価できる。

6 まとめ

本研究では、わずか 11 例ではあるが、郊外団地における外国籍住民の居住実態を明らかにし、周辺地域もふくめた郊外団地の環境が、外国籍住民にとって有用な環境となり得るための生活条件について考察した。当然、各居住者の属性によって求める環境は個別であるが、郊外団地で居住者が生活をおくるには、住戸を自分なりにカスタマイズし、家族、同国人をふくめた様々な人と交流できる状況づくりが求められる。以下に、本研究で明らかになったことをまとめる。

1) 団地内もしくは近郊地域にある環境を利用することで、生活に必要なものを購入できる。また、母国の食材が得られる食材店は情報交換の場ともなり、日常的に利用される重要な環境である。同時に、その生活基盤として、日本人の援助、同国人の存在は無視できない。住文化を共有でき、問題発生時に助け合える同国人の存在は重要であり、同国人が集まって住める状況作りは不可欠である。同時に、団地内の多国籍な居住者同士が集える機会を設定することで、人々の交流促進、引いては多文化共生を軸とした団地再生へつながる可能性が生まれよう。

2) 居住者は、壁や間柱を塗装し家具を備え付けるなど、自分達の生活に馴染むよう住戸内をカスタマイズする能力が高い。しかし、畳の上に直接ビニール床シートなどの敷物が敷かれ、畳はほとんど活かされていない。外国籍住民に対して、畳の機能性をふくめた日本の住文化に対する認識を広める努力が必要と考えられる。同時に、畳を活用しない生活を想定した新たな団地住戸の考案の余地もある。

3) 各居住者は、家族構成や間取りなどにあわせ、部屋に機能を割り当て、襖などの間仕切りを取り外したり、設え直している。襖のような仮設的な間仕切りは、居住者にとって居住環境をカスタマイズする上で有用と評価できる。ただし、15 歳をこえる居住者には個室を割り当てることが多く、よりプライバシーを確保しやすいよう住戸を考案する余地はあろう。

7 今後の課題

本研究で取り上げた対象団地は、いちよう団地 1 例のみ、調査対象世帯もわずか 11 例であり、しかも居住歴、属性が多様である。居住者達は、それぞれ母国の文化を引き継ぎながら団地で生活している。外国籍住民が自国文化を守りながら生活することに対し、理解と敬意を示す一方で、今後、どのように日本の住文化、引いては日本文化を理解してもらう機会を設定するかは、今後の大きな課題である。また、居住者によっては、多国籍住民間の交流をもとめない者もあり、出身国や生い立ち、もとめる交流様態によって、団地環境との相性に差異があることは十分推測できる。今後は、さらに多くの団地、住戸を調査し、出身国間、同性間、年齢間等の比較分析をすすめる必要がある。また、外国籍住民の環境は社会的課題視されることが多い。しかし本研究で明らかにしたように、外国籍住

民の団地生活は非常に興味深い。今後、日本人が、この興味深い団地生活を認識し、互いの国の文化を理解しあう機会をふやすことが、団地環境の質向上と同時に多文化共生を軸とした団地再生の一手法構築へつながると考える。

謝辞

本研究の実施にあたり、多文化まちづくり工房の早川秀樹氏には、有益な助言と大変な協力をいただいた。ここに謝意を表す。

付記 本研究は、文部科学省の 2004 年～2006 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）「首都圏北東周縁部における地域連携による集合住宅団地の再生支援ネットワークの構築」）の助成を受けて実施した研究の一部である。同時に、東京理科大学理工学部建築学科 2005 年度卒業論文「崎川瑛子、鈴木雅之：外国人の郊外団地居住に関する研究 - 多文化共生を軸とした団地再生」に加筆修正したものである。

注

注 1) 一般的に、ニューカマーと称される。

注 2) 本研究では、「外国人」を「日本国籍をもたない人々」、「外国籍住民」を「日本国籍をもたず、かつ日本に定住している人々」の意味で用いる。

注 3) 文献 1) において、外国籍住民 1007 世帯に対するアンケート結果によれば、神奈川県公営の借家住宅にすむ外国籍住民は、8.7%をしめる。

注 4) 他に、外国籍住民に関する研究では、子どもの不就学、母国と日本との間でのアイデンティティーや言語障害を取り上げたものが多くみられる。

注 5) いちよう団地に多数の移住者が住むようになった経緯は文献 5 参照。

注 6) 本研究では、「対象者」をヒアリングした本人、「対象世帯」はヒアリングした本人およびその同居者をふくめたものとして用いる。

注 7) 特別な機会がない限り、外国籍住民に調査内容の理解を得、調査依頼すること自体、容易ではない。よって、より多くの調査対象者を確保するため、移住者の生活支援を行っている団体「多文化まちづくり工房」の協力を得、対象者の推薦を受けることとした。同時に、本団体が主催する日本語教室に、2005 年 5 月～9 月の間、毎週水土の 2 回、日本語のボランティア講師として参加した。しかし調査協力を断られたこともあり、結果、対象は 11 世帯のみとなった。

注 8) いちよう団地から約半径 6km 圏内とする。

注 9) 「1 週間、1 ヶ月の中で何回利用するか」という具体的な質問に対し、「毎日よく利用する」、「1 ヶ月の中で何回か利用する」という答えが多く、正確な利用回数を答える対象者はほとんどいなかったが、「日常よく利用する」場所と「度々利用する」場所は明確に区別されていることが伺える。

注 10) ここでの友人とは、「よく一緒に時間を過ごす相手、悩みを相談する相手」とする。

注 11) 表 5 で示す「単独型」および「団地コミュニティ型」は、わずかに一例ずつで類型とは呼びにくい。しかし、他の 9 例とは大きく異なる強い特徴をもつこと、上記二例がともに、類型としてあり得ると推察できる点考慮し、あえて類型としてあげた。

注 12) 文献 1 81 ページ 図 5-2 参照

注 13) 文献 5 表 4-7、4-8、4-9、4-10 参照

参考文献

- 1) かながわ自治体の国際政策研究会：神奈川県外国籍住民生活実態調査報告書，2001
- 2) 宮島喬：共に生きられる日本——外国人施策とその課題，有斐閣，2003
- 3) 稲葉佳子ほか，まち居住研究会：外国人居住と変貌する街 - まちづくりの新たな課題，学芸出版会，1994
- 4) 稲葉佳子：外国人の民間賃貸住宅入居支援策に関する考察，都市計画学会都市計画論文集，no.40，pp.63～70，2005
- 5) 土井澄香：外国籍住民が集住する公営住宅の生活上の魅力と問題に関する研究 - 神奈川県営上飯田いちよう団地を対象として，住総研「住まい・まち学習」実践報告，論文集 5，pp.133～138，2004

（2009年11月10日原稿受理，2010年3月5日採用決定）